古代韓半島の龍について

チョン・チョミョ（鄭早苗）

はじめに

宗教儀式における様式や装飾にどのようなものが使われてきたのかということに関しては、遺跡、遺物、壁画、文献をもとにある程度把握することが出来る。しかし、韓国の佛教に関しては、例えば拝礼の回数や、五体投地をいつまで行っていたのか、献花の過程や状況、僧侶と一般信徒との位置関係等不明な点は多い。また、古代韓半島の遺跡から出土する遺物、たとえば、短剣、瓦、竈、馬鐸やノロ、牛、豚などの骨などが具体的にどのような役割を担うものとして埋葬されたのかも推定の域を出ない。また高句麗や百済、伽耶地域などの壁画古墳絵画のモチーフに関してもその意味するところが把握されているわけではない。

宮殿内の装飾だけでなく、仏教寺院、道教寺院などの装飾として共通して今も絵画や彫刻に用いられている龍の意味を知りたいと思い、韓国の龍を取り上げて研究してみようと考えたのが今回のテーマである。東アジアの龍の源流は中国に求められ、中国では、甲骨文字のなかに龍に相当する文字が見出せるので、殷王朝の頃から龍の「存在」が知られていたことがわかる。その初期の形は蛇の胴体に角をつけた象形文字だとされる。また殷代の青銅器のリアルな龍の模様から、中国の龍の原型の姿はこの時代に形作られたとみなされている。前漢初期の長沙馬王堆一号墳の木棺の覆いに

も龍が描かれ、龍にたいする関心が皇帝を中心とする範囲だけでなく、支配層にとっては幅広く知られていたことが遺物から理解されるところである。四霊といわれる麒麟・鳳凰・亀・龍のなかで、十二支に龍だけが選ばれたのは、龍が王権と結びついたからではないかといわれているが、王権と結びつく龍の存在を支持する階層が登場していたということであろう。龍は、そのモデルとして蛇、鰐、稲妻、虹などが挙げられてきたが、四神と称されてきた他の玄武、白虎、朱雀と異なり、関連するモデルから水の神とされ、また農業生産の上からも特別に龍が王権と結びつく権威の象徴として迎え入れられてきたようである。例えば漢の高祖はその母が龍と交わって産んだ子であると記されているが、この伝説が記述された頃には龍が水を左右する神であり、その龍と直結することが皇帝の権威づけに必要とされていたという考えが定着していたものと見なされる。龍は水と関連するモデルを原型としながら、さらに空をも駈けるという観念が固定してくるなかで、天上にいる神の意志の伝達者であり、水の神という信頼性が龍を王権と結びつけ、このような思想が漢の四郡設置など、中国王朝と直接関わりを持つことになった古代韓半島の人々の思想に影響が及ぼされ、韓半島古代諸王朝の王権確立とその権威付けに影響力を発揮したものと考えられる。

民間でも、龍が水と関係を深くもつものと考えられ、民間説話に見られるように雨を降らしたり、時には洪水を起こす存在として語られてきた。黄河の神の河伯は龍であるとされ、雨乞いや洪水の時は河伯の龍に牛や馬の犠牲を供えて祈ったのである。龍と雨との関係は中国、韓半島、日本、東南アジアの各地の祭りで今も見られるように、布や木材などの多様な素材を用いて龍の姿が作られ、現在も祭りの主題にもなっているほどである。古代朝鮮三国には多くの龍の史料が散見する。これらの龍の史料は上記した龍の要素が含まれる場合もあるし、そうでないものもある。歴史的に韓半島において、中国思想がどのように伝えられ、固有の考え方に影響を与えて来たのかを知る一つの手がかりとして龍を題材にし、神仙思想や道教の問題にまで言及したいと考えた。

一　王系の権威と龍

古代韓半島の「龍」について調べてみたいと思ったのは先に記したように、龍という想像上の動物に対して韓半島の人々はどのように理解し、宗教儀式や生活に取り入れてきたのかを考察することであった。文献で初見する古代韓半島の龍の史料は建国神話であるため、まず建国神話から見ていきたい。新羅の始祖神話の場合、『三国史記』と『三国遺事』によれば、始祖朴赫居世は白馬が残した卵から生まれたが、王妃は龍の右（もしくは左）脇から生まれたことになっている。龍の右脇が何を意味するのか不明であるが、漢の高祖劉邦のように龍を父とし母を人に設定したという形ではなく、龍そのものが王妃の親という形である。また、『三国遺事』では単に龍から生まれたのではなく、鶏龍という龍から生まれたことになり、単なる龍でないことになっている。鶏龍から生まれた王妃の唇は鶏のくちばしのような口であったが、その子どもを王城の北を流れる北川の水で洗うとくちばしがとれたという。後述するように『三国遺事』の記述は龍より鶏の方に重点が置かれているように読みとれ、ここに記される鶏龍という龍は王権のシンボルと云うよりはむしろ王妃の多産を願っているようである。

高句麗の始祖神話は、中国史書の『魏書』『周書』『隋書』の各高句麗伝では始祖東明王の母は河伯の娘であると記し、『三国史記』や『広開土王碑文』でも始祖の母を河伯の娘とするものの、いずれの場合も直接的には龍を登場させていない。河伯は水の神であるから、龍と関係することを暗に示すものではあるが、始祖生誕に龍の文字を登場させていないところに問題が残るようである。高句麗の始祖神話が成立する頃には龍の役割が一般的にかなり理解されていて、そのために「河伯」と表記されれば、そこには龍が内在することが当然と見なされ、始祖の母の出自を直接的に「龍」と表現しなくても「河伯」としておけばそこには当然龍が内在し、敢えて「龍の神河伯」と書かなくても龍の子孫であるという共通認識があったのであろう。いずれにしても古代朝鮮三国の始祖の王妃は、新羅の場合は直接的に龍が産み落

としたと解釈されるように記され、高句麗では始祖の母に龍を介在させ母方と龍を結合させている。中国の皇帝のように父を龍とするという形をとっていないところに特徴が見出せる。

韓国古代三国のなかでも三国を統一した新羅の場合、中国王権のシンボルであった馬と龍の両者を登場させ、新羅王室の権威を高句麗より高めているようである。しかし、その始祖を『三国史記』は「龍」と記し、『三国遺事』が、「鶏龍」と表記するという相違は、『三国遺事』の方がより古い形の神話を選択して記述したからであろう。太古において、人間の魂を天に運ぶものであると同時に、時をも告げ、多産の象徴とも見なされていた鶏に神秘性を期待していたと考えられる。すなわち鶏に対する畏怖の念と多産を願う意味で、本来の新羅始祖王の王妃の出生には鶏が関わっていたと考えられるのである。しかし、鶏は『日本書紀』で「常世の長鳴鳥」と呼ばれ「冥界の告知をする」もの（『古代日本人の信仰と祭祀』所収、谷川健一著「鶏型土器について」）という役割もあるとされるが、始祖の王妃の出生に鶏を結びつけたのは多産を願ったためとすることが妥当である。

古代韓半島三国のうち高句麗と百済の王系は親子の関係になっているので、百済のことを記述する必要はないが、高句麗の始祖に関していま少し詳述する。高句麗の始祖東明王の母は柳花という河伯の娘で、ある時柳花が河原にいた時に体に日光が当たり、その後大卵を生みそれが始祖東明王になったと『三国史記』はいう。高句麗滅亡からおよそ二五〇年後の高麗王朝の始祖王建の祖母も、竜宮に故郷をもつ龍女であると『高麗史』が記述するように、やはり始祖の母方を龍としているので、韓半島では龍の存在を知ってから王妃と龍とを結びつけようとする固有の考えがあったのかも知れない。

しかし、新羅の始祖の王妃に関して『三国遺事』では鶏龍の左脇から誕生したと記しながら、その注として「一云龍現死。而剖其腹得之」という異伝を伝え、龍の体中に王妃がいたということも伝えている。また、始祖王に関しても『三国遺事』は、白馬が残していった卵からかえって誕生したと云いながら、注では「乃至鶏龍現瑞産閼英。又焉知非西述

聖母之所現也」と、王妃の閼英を生んだということは、西述聖母の現身を云うのではないかとも記す。この西述聖母とは乃ち仙桃聖母のことで、後に地仙となって慶州西岳の仙桃山に住んだという。『三国遺事』の注は、本文や『三国史記』新羅本紀とも異なり道教色を提示している。これと関連する『三国史記』の記事もある。それは新羅独自の伝承ではなく、九三五年一二月に新羅最後の王である敬順王が中国に行ったときのこととして次のような史料をあげているのである。

我朝遣尚書李資諒入宋朝貢（中略）詣佑神館見一掌設女仙像。館伴学士王黼曰。貴国之神。公等知之乎。遂言曰。古有帝室之女。不夫而孕。為人所疑。乃泛海抵辰韓生子。為海東始王。帝女為地仙。長在仙桃山。此其像也。臣又見大宋国信使王襄祭東神聖母文。有娠賢肇邦之句。乃知東神則仙桃山神聖者也

『三国遺事』の注や右の敬順王の記事は、『三国史記』『三国遺事』の両書が編纂された一二世紀、一三世紀頃の新羅の始祖王は道教の最高神である仙桃聖母が関わっていたという伝承の方が、「河伯の子孫」より広く流布されていたのかも知れない。七世紀後半からおよそ二六〇年以上韓半島は統一新羅時代であり、滅んだ高句麗のことを記憶するものもほとんどなく、後述するように仙桃聖母と始祖王との伝承が世間で知られるように意図的に広められたのかも知れない。しかし、『三国史記』『三国遺事』それぞれの編纂者は両書を編纂する際、できるだけ古い記録に価値をおいて編纂したと考えられるが、当時知られていた仙桃聖母のことも書き残す必要性があったのであろう。

仙桃聖母とは道教の西王母のことを指すとしてよいと考えられるが、いますこし言及すると、西王母が仙桃聖母と記されるようになったのはおそらく漢代の武帝以降と考えられる。窪徳忠氏の『道教史』によれば、「神仙が人間界にくること、黄帝の上天が強調されることなども、神仙説の新しい展開である。後に武帝に関連して、西王母が宮中にきて三千年に一度実のなる桃をたべさせたという話がつくられたのは（中略）、武帝が神仙を招く努力をした反映かも知れない」（第2章　道教的宗教集団の成立）と記されているように、桃を食べた西王母の別称が仙桃聖母と見なされるのである。西

王母の別称として瑤地金母が知られているが、道教の神々の中でも昔から人気のあった西王母の今一つの別称が仙桃聖母として捉えても大きな間違いでないだろう。東の黄帝に対して西の西王母という中国神仙思想の影響が、古代韓半島に及んでいたと考えられるのである。しかし、古代韓国の上記の文献では西王母という記載ではなく、西述聖母や仙桃聖母となっているのは、漢の武帝による四郡設置以降、漢の文化が直接的に導入され、その影響によって西王母という名称より仙桃聖母という名称の方が先に韓半島に入ってき、仙桃聖母の名称が韓半島では後代まで慣れ親しまれてきたものと考えられる。

西方の世界の果ての崑崙山に住むという不死の女神である西王母の古い姿は、人間の姿であるが虎の歯と豹の尾という恐ろしい形相に描写されていたが（林巳奈夫著『龍の話』）、紀元前後には女性の姿で描写されるようになったという。この西王母を新羅の始祖と関連させるようになったのは、おそらく新羅が三国を統一して韓半島の覇者になってからのことであろう。新羅が高句麗を滅ぼしたのに、その高句麗の始祖神話のなかに、新羅の始祖神話と同じ龍が登場すると言うことは、統一新羅にとって王系の権威上都合が悪くなったと考えられる。そこで、統一新羅時代のある時期に、新羅の始祖神話の一部を換え、河伯の娘に代えて道教最高神である仙桃聖母をもってきた可能性がある。しかし、『三国史記』の編纂者であった金富軾も『三国遺事』の編者一然も、統一時代に作られたと考えられる新羅の始祖神話ではなく、新羅本来の始祖神話を採用しながら、『三国遺事』の場合は注記するという形で仙桃聖母を始祖の母方に取り入れ、一方、『三国史記』の場合は、九三五年に中国に遣わされたことによって、新羅王室と仙桃聖母の関わりを知ったという形で記述したものであろう。しかし新羅の始祖も高句麗の始祖も、本来の始祖神話の母方は龍と関係していたのである。

二　古代中国の思想と韓半島

始祖神話に龍が登場するのは、龍が水の神として水を司るものであったからであるが、「代表的な龍が、黄河の神であ

る河伯である」（荒川紘著『龍の起源』）ので、農耕を国の主たる生計とする韓半島の人々が河伯という黄河の神の存在を知った時から、河伯を自らの神として取り込んでいったのであろう。多数存在した部族国家の中から統一国家の王位を決定し、さらに王系の権威を獲得して人民を統治しても、天災や侵略の不安は常に存在する。そのような環境を統治者が変革していこうとしても政治力だけでは不可能である。ところが隣国の中国では、古代韓半島に古代国家が成立するはるか以前から考え出され、実行されてきた思想と行動がある。それが神仙思想であり、道教教団の成立でもあった。そして中国ではこのような思想の元で他民族の領土を侵略して自国のものとし、人民を統治していたのである。道教に執着していた漢の武帝に統治されることになった古朝鮮時代の人々は、漢の支配を通して中国の思想と直接的に対峙し、よりよく知ることになり、自らもその思想を取り入れて古代国家形成と運営に応用していったのである。

漢の勢力が古朝鮮に入ってきた紀元前2世紀頃には『道徳経』が知られていたし、陰陽五行説も知られ、道教も体系化していたので、郡県支配下にいた旧古朝鮮人にとってはその思想を知ることは学問的にも画期的なことであったに違いない。しかし、支配を通して一旦は漢の文化圏に入ったものの、直轄的な郡県支配と対立しはじめ、漢の支配を排除しようとする独立運動の結果、高句麗国が成立したのである。

道教を要領よく簡単に言い表せば、「黄帝や老子などを神格化して崇拝し、仙術を宗教化したもの」（前出、窪徳忠著『道教史』）であるが、現実的には天候の順風を願い、死者の霊を弔い、病気を治し、寿命を長くし、現世の幸福を願うための多くの神々を信仰し、これらのために祭りをするという形で信仰形態が表現される。不老長寿を祈念する神仙思想は魅力的だが、現実世界では仙人も仙女も見ることはない。生活の中では形が見えないと不安定であるため、実存した過去の偉人や伝説上の権威者などを神格化し、願いを具現化させようとして対象物に向かって祈禱するのであるが、特に国家祭祀となれば規模も大きくなり、権威付けも重要視される。さらに、王家の場合は王系存続の理由付けも必要になる。そこで人民を納得させ得るだけの国家祭祀が必要とされるだけでなく、説得性ある王系の神格化と権威付けも要求

され、すでに中国で採用され、一定の成果も見られる道教に基づく統治方法が韓半島でも適用されたのであろう。王権の権威化のための有効な思想として、目の当たりで見ていた漢の武帝の権威と安定した国家運営、さらに領土拡大政策や異民族政策は、郡県支配下にいた人々にとって魅力的に映ったことであろう。

韓半島が古代国家を形成し得たきっかけは、前記したように、漢の四郡設置以来の中国諸王朝による異民族統治に反対する独立運動と云える。王莽に反旗を翻して内部を固めていった高句麗侯騶の死後、高句麗族が国家形成の指導権をとっていくが、国家形成後の統治方法は、中国の思想や統治の方法を自国に適応させていこうとすることに比重が置かれていたと考えられる。また、高句麗王系の萌芽期に高句麗侯騶を擁していた高句麗族は反漢運動で王莽を翻弄させたほどの指導性を内外ともに知らしめることになり、いち早く王権確立の目的を達成していこうとした。そのモデルとして取り入れたのは中国ではすでに皇帝が熱意を持って祭祀し、また信頼していた道教であったとしてよいだろう。しかし、中国思想が古代韓半島に入ってきたのは、郡県支配以後からととらえるより、郡県支配以前からと見なす方がよいだろう。中国とは陸続きであるだけでなく、古朝鮮地域は複数の異民族が常に雑居し交流しているところであったから、神仙思想や道教の考え方は自然的な交流で知られていたという前提に立つことが妥当である。

また、道教の神々は典型的な多神教であるため、新しい王朝の始祖を神と同列視しやすいという要素もある。道教は太上老君、元始天尊、玉皇大帝などを最高神としながら、これらの神の下には多くの神がいると考えられている多神教で、老子が神になっただけでなく、山、川、風、雨も神になり、また堯や舜という伝説上の聖天子や実存した周の文王や秦の始皇帝、孔子、顔回、各種の星座や星も神になるなど、非常に幅広い多くの神を有するだけでなく、各民族によって新たなる神を創造しても許容される宗教である。従って政権を掌握した首長が王者になるとき、権威の正当性を道教の思想に求め、実在、非実在に関わらず王系の始祖を水を司る河伯に繋げ王権強化の助けにしたものと考える。

道教と神仙思想との区別、もしくはその境界線に対する定説はなく、さらに祭祀形態になれば儒教との区別も難しく

なる。また古代朝鮮三国が成立するはるか以前の中国では、すでに道教が幅広く知られていただけでなく、前漢の元帝の頃には陰陽災異説と密接に結びついた儒教が政治や社会に広がっていたと云われる。中国諸王朝やその周辺の諸民族と陸続きであった高句麗は中国の影響が導入されやすい位置的環境にあり、多くの思想や文化が流入してきたが、ここで簡単に中国の道教と儒教に関して概観したい。

中国では戦国時代になると、儒教に反発して道教と密接に関わりを持つ道家が出現し、道教の社会的認知が高まったと云われる。秦の始皇帝が徐市（徐福）などの方士たちをして三神山に不老の薬を求めさせたことは有名であるが、前二世紀の前半になると、道家が学派として明確に認識されていただけでなく、道家の勢力が大きく成長していったと考えられている（『道教史』・窪徳忠著）。秦代から漢代の初期にかけては、黄帝と老子を始祖とする黄老の学が盛んになり、武帝（在位一四七～一六七）は黄老の学を積極的に取り入れただけでなく、一年に二度宦官を苦県に派遣して老子の祭りを行わせ、神仙道と方術を中核の内容とした黄老道が公の宗教と認められるようになったという（『道教と気功』・李遠国著、大平桂一・大平久代訳）ように、道教が次第に取り入れられていったとしても、儒教にたいする信仰心が弱化するわけでもなかった。

また儒教では、戦国時代末期、諸国を遊説していた荀子が、生命の根源として天地、人の根源として先祖、政治・道徳の根源として君主の三本に対する礼を重視し、それぞれ郊祠（天の祭り）・地の祭り・穀物神の祭り・祖先祭を奨励するなど儒教の祭祀が広範囲に取り入れられていった。前漢代になっても相変わらず道教は根強く重宝がられているものの、儒家の礼制と礼儀に合致させるように郊祠制や廟制が改革されていくだけでなく、前漢末期には儒者の登用が異常なほど多くなっていくほどであった。その後、讖緯説の神秘的な予言を利用して王莽は新政権の獲得を実現させた。その後、後漢時代の明帝や章帝もまた熱心に讖緯説を信じた。後漢時代になると王充のように讖緯説の虚構性を指摘したり神仙

不老と鬼神の存在を否定し、実証性を高く評価する学派も生まれていた。またこのころは一部の人々の間では仏教も信じられるなど、思想的に複雑で、しのぎを削る状況下にあったといえる。

このように思想的に混沌としていた後漢時代、大賢良師と自称した張角は黄老道を信じて従ってくる病人に対して、符水を飲ませたり呪術を施したりして病気を治したが、この治療が意外と効果があり、張角のもとに多くの人々が集まってくるようになった。このような事態に自信を得た張角は、信者を動員して後漢王朝を倒そうとし、一八四年に黄巾の乱を引き起こした。その後、張陵が太平道を成立させ、その五斗米道は二一五年、魏の曹操の攻撃を受けて降伏するまで「王国」といわれるほど道教の勢力を拡大していった。特に黄巾の乱の中心勢力は山東半島出身者が多かったといわれるが、中国全域を大混乱に陥らせたこの乱の情報は、陸続きでありかつ距離的にも遠くない高句麗地域の人々の知るところになったことは十分に推測し得る。曹操に追われた兵士達は、かつて漢の武帝によって郡県支配され、中国にその存在が知られていた高句麗の地まで逃れていったであろう。五斗米道は、その後張陵を天師といっていたところから、天師道とも云われるようになり、高句麗でも信者数は増加していった。

この天師道と高句麗ととの関係を『三国遺事』は

高麗本記云。麗季武德、貞觀間。國人争奉五斗米教。唐高祖聞之。遣道士。天尊像。来講道德経。王與國人聴之。

と記し、『三国史記』は

（高句麗栄留王七年）王遣使如唐請班暦。遣刑部尚書沈叔安。策王為上柱国遼東郡公高句麗王。命道士以天尊像及道法往。為之講老子。往及國人聴之。

と記して、七世紀に高句麗に五斗米道が入ってきて積極的に奨励されていたというように記されているので、およそこの頃が高句麗に道教が入ってきた時期であると見なされてきたようである。しかし前記してきたように実際はこれよりはるか以前に、あるいは中国で起こったことはほぼ同時期に、高句麗にも知られていたのではあるまいか。このような

中国の動きが高句麗に知られると、時間差をおいて百済や新羅にも道教だけでなく道教教団の動きまで入ってきた可能性は十分考えられるのである。

一九九四年に高句麗第二の首都であった中国吉林省集安の壁画古墳を見学した時、その絵画から受けた印象は非常に宗教的で不思議なものであった。およそ集安の高句麗古墳の年代は四世紀頃から六世紀頃に比定されるものが多いようであるが、その古墳壁画に描かれた絵画には、三本足の黒い烏、黒い蛙、牛の顔をもった人物像、仙人、仙女、いろんなバリエーションで描かれた龍の姿、鍛冶をする人物像、四神像、琴を奏でる女人像、相撲図、力士像、七星図、舞踊図などがあり、なんらかの強力な意志のもとで描かれたこれらの絵画は死者と残された者に送られたメッセージではないかと思われた。その時まで、道教や神仙思想に対して関心はなかったが、これらの絵画に接した時、仏教とは異なる強烈な宗教性を感じざるを得なかった。これらの絵画群は、古代高句麗人がどのような宗教観をもっていたのかという問題を追求していく際のテーマになりうるであろう。特に、ほとんどの壁画に描かれている龍の姿は、実に躍動的であるし、多様で描き慣れているように感じられたのである。想像上の動物である龍の姿は、高句麗人の宗教性だけでなく、高句麗以外の文化圏との影響を感じざるを得ないものであった。しかし、高句麗壁画の龍は決して壁画の主人公ではない。むしろ、壁画の龍は葬られている者の護衛者であるかのようであり、そこには河伯の神のイメージである、神聖で見るものに畏怖心をいだかせる龍というよりは、「龍に乗る神仙」の図など見れば神仙に飼育されているのが龍であり、龍を神自身とする訳にはいかないような描かれ方なのである。高句麗の始祖東明王が扶余から追われるときに「我は河伯の子孫なり」と言うと、川の生物が即刻助けに来たような、龍の神としての威厳は見られない。

古代三国において龍の威厳が始祖神話に用いられような凛々しいものでなくなったのは『三国史記』の場合にも見られることである。高句麗、百済、新羅それぞれに龍が記るされているが、もっとも長く王朝が続いた新羅に龍の史料が多いのは当然であるが、高句麗本紀の龍の記載は一ヵ所にとどまり、その役割は王の即位を祝うためなのか、天の意志

を伝える役割を担っていたのか「黄龍見於鶴嶺」という簡単な記載だけである。百済の龍は五ヵ所に記載されるが、川や王都の井戸から出現するだけで、どのような役割を担って史料に記されたのかやはり分からない。新羅では十三ヵ所に龍の記事が見られ、王死去の予兆、敵の侵略などを知らせるものと解釈できる場合と、単に宮殿の井戸から出現するなど意味不明な記事もあるが、おおむね吉凶を予言するものとしての役割を担わされているようでもある。

ただ文武王二十一年（六八一）の王薨去の際「群臣以遺言葬東海大石上。俗伝王化為龍。仍指其石為大王石」を、『三国遺事』と関連させれば、王自身が死後に倭の侵略に備えて海龍になるというもので、従来の龍の役割を逸脱して、人間が死後、龍に化身するというのである。龍が人間になるのは『三国遺事』の「処容郎望海寺」の処容に見られるように、龍が人間の姿に化身するという形は他にも散見するが、人間であったものが龍になるということは、珍しい発想といえる。河伯の神である龍や四神の龍は龍そのものが神であるが、龍が黄帝の乗り物であったり、黄帝の両手に握られるほど小さい存在である場合もある。龍の神的な役割に関して『論衡』では批判的であるという（林巳奈夫著　『龍の話』）。古代韓半島の人々が龍の役割を過小評価する考えは、後漢の王充が書いた『論衡』に影響されていたのかどうかは分からないが、古代三国で読まれていた可能性は高い。

集安に高句麗古墳壁画が描かれたのは四世紀頃からであるとされるが、このころ東アジア諸民族の活動は活発であったため、多様な文化が交流していたであろうということが高句麗古墳壁画から伺い知れるのである。従来高句麗が始めて道教を取り入れたとのは七世紀と云われてきたが、それは先に引用した高句麗本紀という文献史料に基づいたものにすぎなかった。しかし、龍を追求していくだけで、思想的な中国との関わりの歴史ははるかに古いものであるという予測がつく。神仙思想や道教、さらに儒教をも取り込んだ祭祀制度などと古代三国との関係は従来いわれてきた説よりは古くなる可能性は高い。また、龍を通して見ただけで古代中国の儒教、神仙思想、儒教、さらに佛教も交錯していることがある程度分かってきた。

本研究における成果といえるものは、何よりも龍をある程度追求したことにより、研究テーマがさらに広がったことである。この稿では『三国遺事』と龍との関係、さらに佛教の僧侶が書いた『三国遺事』と固有信仰との関係には触れていないが、これは現在研究を進めている途中であり、興味深い史料が多く見出せそうである。古代韓半島の龍の研究という、どの方向を向くのか分からないようなテーマにも関わらず、真宗総合研究所の個人研究として認められた本研究の成果は、自分自身としては今後のテーマが与えられたという点で成果が大きかったと考えている。『三国遺事』と『高麗史』の道教、儒教、佛教、固有信仰と関わる史料を見ながら、さらにこの問題を考察していきたいと考えている。